

会報

国鉄闘争全国運動

国鉄分割・民営化反対！ 1047名解雇撤回！

196号
2026年9月18日

国鉄分割・民営化に反対し 1047名解雇撤回闘争を支援する全国運動事務局
千葉市中央区要町2-8 DCC会館内
TEL 043-222-7207
nationwidemovement@yahoo.co.jp

東京高裁宛て
行政訴訟署名
1万962筆
(26年9月18日)

11・1浅草公会堂集会

労働者の国境を超えた団結で戦争を止めよう！

今ほど労働運動の根本的変革が求められていることはありません。米トランプ政権と一体となった高市政権が「安全保障環境の変化」を口実に社会全体を戦時体制へと呑み込み、中国への侵略戦争へ突き進もうとする今、労働組合が「反戦」の先頭に立たなければなりません。その強い決意を込め、11・1労働者集会への参加を訴えます。

11・22集会と一体で全国から大結集を

7月16日、1047名解雇撤回裁判の第3回控訴審において、東京高裁・阪本勝裁判長は、不当労働行為の真相を握るJR元会長・井手やJR東日本会長・深澤の証人尋問を突如として却下しました。前回の裁判で東裁判長が「JR設立委の不当労働行為を認めないなら証人採用する」と明言したにもかかわらず、国家権力は東裁判長を地方へ飛ばし、阪本裁判長を据えて証人採用を握りつづけたのです。

DP比3.5%化(25兆円規模)や、10月臨時国会での9条改憲・緊急事態条項の策定、AIやドローン技術を動員した「新しい戦い方」の導入は、世界戦争・核戦争の危機を直接現実化させるものです。

政府は『骨太方針2026』で防衛産業を「成長の柱」とし、全社会を戦時体制へと引き込もうとしています。楽天下の迎撃用ドローン開発企業との提携、日産・追浜工場跡地の軍用ドローン拠点化検討、日本製鉄・呉工場跡地の防衛省取得など、民間企業や技術が戦争に駆り出されようとしています。陸上自衛隊が多数の戦死者を想定

など、社会全体を戦時化する企みが進行しています。大軍拡の先にあるのは法人税・所得税・消費税の増税と社会保障の崩壊です。また労働市場改革」は、団結権・争議権を否定し、軍需産業へ労働力を強制移動させる「労組なき社会」の攻撃です。政府・資本に追従する連合を打倒し、闘う労働組合を今こそ甦らせなければなりません。

今年の11月集会は、日比谷野音改修工事に伴い屋内集会として開催されますが、韓国・民主労総ソウル地域本部をはじめとする「東京―ソウル国際共同行動」として、世界中の労働者と強く握手して開催されます。さらに、共同呼びかけ団体による11月22日の全国反戦集会とも響き合い、26年秋を日本労働運動の歴史的転換点にします。

これは戦時下における国家権力・裁判所の剥き出しの大反動であり、国鉄分割・民営化攻撃の不当性と、この闘いが国家の根幹を揺るがす力を持っていることの明瞭な証明です。関道利委員長が提起した「1047名解雇撤回裁判の勝利」と「第2期11月集会運動」の創出に向け、不当労働行為を絶対に許さず現場からの反響を巻き起こしましょう。

アメリカ帝国主義の深まる危機と中国侵略戦争への踏み出し、そして高市政権の「台湾有事は存立危機事態」とする暴走のもとで、核容認・核共有の危うい動きや、12月の安保3文書再改定に向けた大軍拡が急速に進められています。軍事費のG

政府は『骨太方針2026』で防衛産業を「成長の柱」とし、全社会を戦時体制へと引き込もうとしています。楽天下の迎撃用ドローン開発企業との提携、日産・追浜工場跡地の軍用ドローン拠点化検討、日本製鉄・呉工場跡地の防衛省取得など、民間企業や技術が戦争に駆り出されようとしています。陸上自衛隊が多数の戦死者を想定

など、社会全体を戦時化する企みが進行しています。大軍拡の先にあるのは法人税・所得税・消費税の増税と社会保障の崩壊です。また労働市場改革」は、団結権・争議権を否定し、軍需産業へ労働力を強制移動させる「労組なき社会」の攻撃です。政府・資本に追従する連合を打倒し、闘う労働組合を今こそ甦らせなければなりません。

今年の11月集会は、日比谷野音改修工事に伴い屋内集会として開催されますが、韓国・民主労総ソウル地域本部をはじめとする「東京―ソウル国際共同行動」として、世界中の労働者と強く握手して開催されます。さらに、共同呼びかけ団体による11月22日の全国反戦集会とも響き合い、26年秋を日本労働運動の歴史的転換点にします。



動労千葉を支援する会が9月5日、26年度定期総会を開催した。東京東部の運営委員が開会あいさつを行った後、織田事務局次長が運動方針案の提起を行った。

織田事務局次長は、今年の総会が国鉄闘争をめぐる激しい攻防を闘い抜いた歴史的局面であり、また山本事務局長を失ったなかでの初めての総会だと述べ、7月16日に行われた1047名解雇撤回裁判の第3回控訴審において、新裁判長が従来の証人尋問方針を翻した異例の訴訟指揮を強く糾弾した。長年の支援で掴み

裁判勝利へ運動拡大を
動労千葉を支援する会が定期総会
取った真実を国家権力が隠蔽することとは絶対に許されないとし、この前代未聞の事態を徹底弾劾して運動拡大の力へ転換しようとして強く訴えた。具体的運動方針として、以下の取り組みを打ち出した。

●次回控訴審への全国結集と高裁包囲デモの敢行
●11・1全国労働者集会に向けた大結集の組織化
●巨大な反戦闘争としての11・22大行進全国集会への総決起
●外注化阻止ニュースのJR職場配布、会員拡大、物販活動、ローカル線廃止反対などの地域闘争との合流、国際連帯の強化

会計報告を経て、動労千葉の委員長が、車の両輪としての物心両面におよぶ支援へ感謝を述べるとともに、11・1集会の成功と、現場の仕事や安全・労働者の権利を軽視するJRの攻撃と闘う決意を表明した。続いて各地から闘いの報告が行われ、東京西部の地道な物販や署名活動、木更津の久留里線廃線化反対闘争、三多摩における日本機械工業労組の会加入などが発表されたほか、福島、神奈川、ユニオン習志野からも報告が続いた。

最後に新年度運営委員を選出し、懇親会では会員と組合員が交流を深め、最後に組合員全員が登壇して感謝と闘争への決意を語った。



“労働運動の大変革を”

11・1集会の成功へ実行委員会

11・1労働者総決起集会(浅草公会堂)に向けた第2回実行委員会が9月6日に開催された。

冒頭、動労千葉の委員長が国鉄1047名解雇撤回裁判の現状を報告。あんな無様なやり方で証人申請を却下したのは、全国の運動の力で裁判所を追い詰めてきたから

冒頭、動労千葉の委員長が国鉄1047名解雇撤回裁判の現状を報告。あんな無様なやり方で証人申請を却下したのは、全国の運動の力で裁判所を追い詰めてきたから



だ」と語り、この闘いに勝ち切ることに期する。11・1集会を「第2期労働者集会運動」の出発点として大成功させるための協力を強く訴えた。

続いて動労千葉の田中顧問が会議の基調を提起し、世界戦争へ突き進む危機的な情勢に対し、社会を根底から変革する労働者の闘いが必要であると、労働運動の大変革運動として11月集会への全力の取り組みを要請した。

あらためて問う
国鉄闘争の意義

動労千葉「ジェット燃料輸送阻止闘争」の教訓・補論

動労千葉による三里塚ジェット燃料貨車輸送阻止闘争は、一労働組合の闘争を超え、国家権力による国策・軍事利用に對して、労働者が「生産点（職場）」から実力阻止を突きつけた歴史的闘争であった。

本稿は「動労千葉・ジェット燃料輸送阻止闘争の教訓（上・下）」の補論として、77年12月3～5日に展開された「第一波強力順法闘争」の具体的ドキュメントや当事者たちの証言を分析し、「労農連帯」「職場支配権」「実力闘争」という概念が、いかに現場で具体化され実践されたかを考えたい。

すべて敵に見える順法闘争の孤独・恐怖

ジェット燃料貨車輸送の提案 人の組合員が逃げずに闘う体 に対する闘争戦術として、動労 千葉の採用した順法闘争（当時 組合員一人ひとりに大きな精神的・肉体的負担を強いる過酷な戦術であった。

全線で遅延・運休

12月3日、動労千葉は総武緩行線、総武快速線、総武本線、成田線、鹿島線、内房線、外房線、本原線、久留里線、東金線で始発から順法闘争を開始した。

津田沼駅ではまだ暗い午前4時に身を置く。数十本の列車を運休に追い込みラッシュ時の過密ダイヤの中で列車を1時間以上遅延させれば、ホームを埋め尽くす群衆から罵声や紙つぶて、唾が飛んでくる。

73年の「上尾事件（上尾暴動）」や「首都圏国電暴動」の記憶もあった。動労千葉も船橋事故闘争時の順法闘争では、千葉運転区支部長が乗客の暴力で頭部を3針縫う負傷を負った。こうした経験は、組合員に少なからず「恐怖心」として刻まれていた。

福田内閣が翌年3月30日の成田開港を発表し、国鉄当局からジェット燃料の貨車輸送方針が示された際、動労千葉地本は国家権力との真っ向対決を覚悟しつつ、何よりもまず「1400

倉支部・成田支部なども闘争の最前線に立った。

この日、総武緩行線では最高で遅れ76分、運休129本。総武線快速線で遅れ84分、運休8本。成田線で遅れ96分、運休6本など、1日で千数百時間の遅れが生じた。2日目の4日も同様の減産闘争が続いた。

3日目を迎えた12月5日、本八幡駅ホーム手前で停止させられた電車の非常コックを操作して線路に飛び降りた乗客の一部が、「運転士は動労千葉だー」と叫んで投石を開始した。乗車していた3人の運転士のうち1人が逃げ遅れ、数分間にわたり座布団で頭を庇いながら投石にさらされる事態が発生した。西船橋駅でも乗客が運転室へ乱入しようと押しかけた。

当局と警察が狙ったのは、まさにこの混乱に乗じた「第二の上尾暴動」の再来であり、乗客の怒りを利用して動労千葉を圧殺することであった。マスコミは一斉にパッシングを展開し、朝日新聞の社説や瀬戸山法相による「順法闘争に刑事罰を科す」との恫喝発言が相次いだ。

津田沼駅ではまだ暗い午前4時に身を置く。数十本の列車を運休に追い込みラッシュ時の過密ダイヤの中で列車を1時間以上遅延させれば、ホームを埋め尽くす群衆から罵声や紙つぶて、唾が飛んでくる。

運転士を守りぬいた農民・乗客の決起

しかし、ここで日本の労働運動史に残る決定的ドラマが生じたのである。本八幡駅で投石を受け、窮地に陥った運転士に對し、他の乗客たちが「僕らが守るから！」と声を上げ、身を挺して運転士を囲み駅まで安全に連れて行ったのである。

上尾事件のように乗客が運転席や信号などの機器・設備を破

構築があった。

連日、千葉駅や津田沼駅、成

田駅などの各拠点に、反対同盟の戸村一作委員長や北原敏治事務局長、婦人行動隊をはじめとする100人以上の農民たちが自ら駅頭に立った。農民たちは

「動労千葉の順法闘争を支持してほしい」と乗客に直接訴えた。三里塚闘争という国家権力の巨大な不正義に對する農民の闘いの歴史

は千葉県民の良く知るところであり、農民の訴えは乗客の意識に強く作用したのである。

また浅田光輝氏らが率いる「動労ジェット闘争支援共闘会議」の労働者や学生たちは、各駅頭やホームで連日、文字通り身体を張って防衛と街頭宣伝を展開した。西船橋や本八幡での混乱時も、支援勢力や乗客が実力で運転士を防衛した。

津田沼駅頭などでは連日10万円（現在の物価換算で20万円以上）を超えるカンパが乗客から寄せられた。

津田沼支部の若い運転士は、ホームに入る

なぜ、このような「景色の転換」が生じたのか。そこには、重層的かつ広範な社会的連帯の

労働者の主体形成—労農連帯・階級的力の発現の歴史的検証

時）は「天地がひっくり返った、太陽が西から昇ったという表現をしてもいいほどの風景の転換だった」と述懐している。

動労千葉の組合員は、自分た

全職種1400人が一体で闘争に決起

この順法闘争は運転士だけの闘いではなかった。例えば佐倉支部（約160人）は、半数が乗務職場で、残り半数が検修職場であった。検修職場における減産闘争は、車両の安全検査規程を厳格に適用する形で展開された。通常1日で仕上げる検査に2日を費やす。これにより、毎日交番から1両、2両と運用可能な予備車が消えていき、最終的には本線走る機関車や電車そのものが物理的に枯渇し、大量の運休が発生した。

これまで歴史的に順法闘争といえは旅客列車の運転士が矢面に立ち、貨物や地上職場は後方に退きがちであった。しかし、

ちの闘いがゼニカネのためではなく、社会的正義のためであることを身体感覚として理解し、深い自負と当事者意識を獲得していったのである。

動労千葉は執行部による徹底的な職場オルグと討論を経て、全職種を一元とさせた。

また6～700人もの運転士が一糸乱れず闘争に入っため、国鉄当局は「誰が中心となって列車を遅らせたのか」という個別の立証ができず、役員や活動家の見せしめ処分や不当処分

ジェット燃料阻止闘争の今日的意義

動労千葉のジェット燃料貨車輸送阻止闘争は、現代においてさらに教訓に満ちている。

自衛隊基地へのミサイル搬入などに対する反対運動や抗議行動は各地で取り組まれている。だが、それらのミサイルや兵器が実際に製造されている軍需工場や関連メーカー、あるいは兵站を担う物流・通信の「現場（生産点）」において、労働者の闘いの波が起きている現実がある。多くの労働組合が「会社の方針」「業務命令」「雇用の維持や賃金」を優先し、自らの日常的な労働に對して問題提起もできない状況がある。

実力闘争の条件

動労千葉のジェット燃料輸送阻止闘争は決して単独で成し遂げた闘いではなかった。

三里塚の農民が国家権力による暴力的な土地取り上げに對して長年にわたり体を張って闘い抜いてきた社会的正義と闘いの蓄積があり、それに対する共感

の攻撃を粉砕したのである。当時の中野洋書記長は、この闘争を振り返り次のように語っている。「1400名という人間集団一人一人が持つすばらしいエネルギーを全面的に開花させる闘いを日本の労働運動はやっていない。それをやり切ったら、ものすごいエネルギーを発揮できるんじゃないか」

西森巖副委員長が「自分らの損得を乗り越えた闘いだ」と語ったように、動労千葉の組合員たちは「労農連帯」という社会的大義に決起したのである。

路線の正義性とは

水野正美副委員長は、「動労千葉の本当の強さは、路線の正義性にある」と後述べている。路線の正義性とは、あらかじめ首尾一貫した完璧な理論がどこかに存在し、上から「この指とまれ」と指令を出して組合員を集める運動ではなく、現実の過酷な攻撃にぶつかりながら、組合員全員で模索し続ける中で形成されるものである。

船橋事故闘争においても、「事故は自分持ち」「事故を起こしたらしょうがない」という意識に對し、「原因は当局の安全無視と過密ダイヤにある」という本質的視点を提起し、それが組合員の心をつかんで大衆運動へと広げられていった。

労働者がその時代と真つ正面から向き合い、実践と経験、そして職場での議論を通じた「大衆的な英知」の中で自らの路線を鍛え上げる——それが動労千葉の在り方である。闘いの連続の中から大衆的に習熟し、生み出されてきた路線にこそ、不滅の正義性と団結力が宿る。

戦争は、工場で労働者が兵器を作り、鉄道や港湾で労働者がそれを運び、通信技師が回線をつなぎ、医療従事者が動員されて初めて実行される。社会的正義のために職場（生産点）から実力で立ち上がる時、労働者は国家の戦争政策をもストップさせることができる。

1400人の動労千葉の組合員は、解雇や減給処分、逮捕や怪我のリスクを負いながら、「危険なものには運ばない」「農民を

